

暖地および温暖地に適したハトムギ新品種「あきしずく」の育成

手塚隆久・松井勝弘・原貴洋

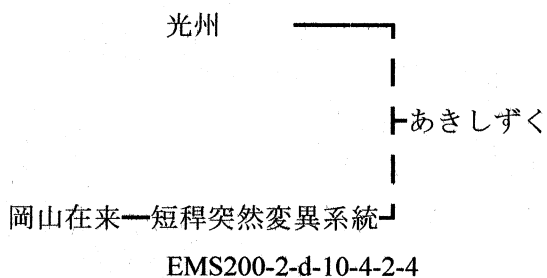
(九州沖縄農研)

【目的】

ハトムギは耐湿性が比較的高く、水田転作物として栽培が可能である。ハトムギは種子を焙煎してお茶に加工したり、精白粒を雑穀米の材料として利用している。国内産のハトムギ需要は増加しているが、供給が不足して実需者からは増産が求められている。そこで、暖地および温暖地での栽培適性と収量性に優れたハトムギ品種を育成した。

【育成経過】

1996年九州農業試験場資源作物研究室（現九州沖縄農業研究センター、熊本県合志市）において、韓国からの導入品種「光州」（ジーンバンク番号 JP83421）を母本、「岡山在来」種子に突然変異誘発源化学物質 EMS を処理して作出した短稈突然変異系統 EMS200-2-d-10-4-2-4 を父本にして交配し、1997年 F₁ 養成、1998年個体選抜を行い、1999年から系統育種法で選抜、固定を図ってきたものである。2000年より生産力検定予備試験に供試し、有望と認められたので2001年「九州1号」の地方配付番号を付けた。2007年世代は F₁₁ である。2007年種苗法に基づく品種登録申請を行った。



第1図 「あきしずく」の系譜

【特性概要】

成熟期の草丈は短く、茎数は多い。稈径は「はとむすめ」と同じである。幼苗時の葉鞘色は赤紫、柱頭色は濃赤紫で、「はとむすめ」、「はとひかり」と異なる。出穂期には葉鞘色と葉身色が緑色になる。穀実の形は長楕円、色は茶褐、光沢は良で、「はとひかり」よりやや長い。百粒重は「はとひかり」より軽く、「はとむすめ」よりやや重い。着粒層は「はとむすめ」、「はとひかり」より狭い。

出穂期は「はとむすめ」、「はとひかり」より1～2日遅く、成熟期は「はとむすめ」、「はとひかり」とほとんど同じ中生である。耐倒伏性は強い。収量性は「はとむすめ」、「はとひかり」よりやや多収である。葉枯病は「はとむすめ」、「はとひかり」より強い。

穀実の硬さは「はとむすめ」と同じである。子実歩留は「はとむすめ」と同じである。粒は糯性で、粳粒はほとんどない。精白粒の白度は「はとむすめ」「はとひかり」と同じである。

「あきしずく」は福岡県、広島県、栃木県で栽培普及の予定である。

第1表 生育特性

品種	成熟期 (月.日)	草丈 (cm)	茎数 (本/株)	着粒層 (cm)	葉枯病 抵抗性
あきしずく	9.22	107	24	56	やや強
はとむすめ	9.22	114	20	63	やや弱

第2表 収量・品質特性

品種	穀実重 (kg/a)	百粒重 (g)	精白粒 白度	焙煎粒 外観
あきしずく	31.3	8.8	69.9	艶があり良
はとむすめ	25.7	8.5	69.7	標準